opusdei.org

ローマでのドラ

チッタ・レオニーナのセチーク 1946年で、1946年で、1946年で、1946年で、1920日では、100日では

2016/05/08

アンドレス・ベラスケス・デ・ピラ ダ著「オプス・デイの創立者」第3 巻(2003年改訂版)に、以下の記述 がある。

聖ホセマリア・エスクリバーは、娘 たちの到着を希望と忍耐をもって 待っていた。・・・12月16日の 手紙には、娘たちに順序良く若干の 注意を与えている。つまり、飛行機 で来ること、来る人の名を電報で知 らせること、ローマに行くという良 いニュースを家族に手紙で知らせる 勧め、そして持参すべき品々を挙 げ、末尾には、最も些細なことにま で気を配るパドレの愛情が滲み出る 小さな指示を与えている。「こちら の女性はよく帽子を使うことを知っ ておくと良いよし。

1946年12月27日、使徒聖ヨハネの祝日の午後、彼女たちは到着した。現れたのはエンカルニタ・オルテガとドリータ・カルボと3人の補佐ヌメラリ、フリア・ブスティーリョ、ドラ・デル・オヨ、そしてロ

ザリア・ロペスであった。飛行機が 着陸して間もなく、この5人はひと かたまりになって預けた荷物が出る のを待っていた。それぞれ手にはか さばる荷物を持って。荷物の超過料 金を払うお金を持っていなかったか らだ。エンカルニタはこう述懐す る。「私たち5人は肩を寄せ合って 立っていました。知らない国に来 て、言葉もわからずお金も持ってい ない不安で呆然となっていました。 そのとき、ドン・アルバロと一緒に こちらに来られるパドレの姿が見え ました。そのときの喜びは何と言え ば良いのか・・・。この新しい国が私た ちの国であるかのように感じまし たし。

エンカルニタによれば、「家に到着したときの感動は今も忘れられない」。パドレと一緒にいることと、次から次へと新しいことを目にする 状態が心を高ぶらせたのだ。しかし、すぐにあの女性たちは仕事に取 り掛かった。(管理部から完全に独立した)チッタ・レオニーナのセンターの日記には、1946年12月27日という記念すべき日について「とうとう管理部が到着した。・・・台所とその周辺は見る見

た。・・・台所とその周辺は見る見る内に姿を変えた」という簡潔な記述の後に「今日はよく整えられた食事をした」とある。

買物の支払いはしばしば後払いだっ た。先の戦争の影響は食料不足に顕 著に表れた。具体的には、卵などは 管理部がローマ近郊の村に買出しに 出かけなければならなかった。著名 な招待客があると、それにふさわし い献立を準備しようと知恵を絞りに 絞って調理法を工夫したが、それを 嘲笑うかのように停電やガス切れが 起った。これは、泣き笑いを誘う状 況を作り出した。エンカルニタによ れば、「来客に食事を出さねばなら ない時間に、火鉢で食事を作らねば ならないことが一度ならずありまし

た。ガスがなかったからです。そんなときは、給仕をしていたドラ・デル・オヨは、少しでも時間を稼ぐために、ゆっくりと振舞いました。そして、食堂から戻るやいなや、手袋を脱いで火力を上げるために炭火に息を吹きかけるのでした」。

そのような窮乏の中で超人的な調理 の努力をした管理部のおかげで、その著名人を食事でもてなす、それです。 京でオプス・ディについる招待ないで、ままではいるの語では、はないでは、 「食を空腹に気がついいがないでは、 はないでは、「招待客番だった。のも喜んで」。 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/romano-dora/ (2025/10/29)